

演題「異物混入防止と作業効率を上げる取り組み」

【目的】

大阪母子医療センターでは異物混入で毛髪が特に多く厨房内での混入・病棟での混入を含め年間約 20 件発生していた。また物が乱雑に置かれており作業効率が悪かった。異物混入件数を減らすには、余裕を持った確認作業が必要と考え同時に作業効率を上げる取り組みも行った。

【方法】

厨房内の粘着ローラーがけを行い、毛髪が落ちていないか調査した。制服の帽子はネット 2 枚被りからフルキャップに変更した。取るミングのみしていたが、粘着ローラーがけも追加実施した。異物混入を見逃さないよう独自の 5S を取り入れチェックを強化した。整理：調理器具や使用食器が劣化し欠けやひび割れがないか、異物がついていないかチェックした。スポンジは劣化すると異物混入となりやすいので毎週日曜日に交換した。ダスターや鍋つかみは劣化していればすぐ取り換えた。整頓：器具等の置き場所を決め、誰でも分かるようにした。器具消毒保管庫内の写真を扉に貼り置き場所を明示した。開封日表示・賞味期限なども分かりやすくした。清掃：ゴミ、汚れを取り除き異物混入とならないようきれいな状態を保ち清掃の抜けがないよう掃除当番表を作った。修理修繕：調理器具備品破損確認表・食器破損表を使い破損、劣化した物は廃棄、交換し、異物混入とならないようにしている。しつけ：ルールを正しく守る習慣をつけるため朝礼で異物混入の状況などを報告し教育を行っている。ボードに毎日の件数を書き出し注意を促している。

【結果】

2017 年度は異物混入件数は 18 件だったが、2018 年度は 9 件と半減した。器具の置き場所も分かりやすくなり作業に取り掛かる時間も早くなった。新人も置き場所がすぐ分かり、教えて貰う時間が短縮出来ている。

【結論】

異物混入防止と作業効率を上げる取り組みは一人ではできないが全員で協力し積極的に実践、継続していく事で混入件数が減り安全で作業効率の良い職場になると考えられる。

演題「給食会社社員への手洗いチェッカーを用いた手洗い指導」

【目的】

食中毒予防するためには手洗いが重要だが、洗浄が十分であるかは目視確認できない。そこで弊社では蛍光塗料を汚れに見立て洗い残しがブラックライトで確認できる手洗いチェッカーを用いた指導を実施している。今回、手洗いの実態把握と教育効果について検討することとした。

【方法】

2017年9月～2018年8月1357人（既存社員1265人・新入社員92人、男性270人・女性1087人、栄養士220人・調理師311人・調理補助826人、平均年齢50.7±15.7歳）に蛍光含有ローションを手に塗り通常の手洗いを行ってもらい、洗い残しを確認した。その後、洗浄不十分な部分を意識した手洗いの実行、衛生担当者による巡回確認を行った。2018年12月～2019年2月に77名の拭き取り検査で一般生菌数を調査した。

【結果】

洗い残し個所は掌、甲、親指・中指・人差し指の指先・手首に多く、掌より甲側に多かった。性別・年齢による違いはなく、職種では栄養士は調理師・調理補助より洗い残しは少なかった。既存社員は新入社員より洗い残しが少なかった。既存社員では栄養士は調理補助より、新入社員では女性は男性より、栄養士は調理師より洗い残しが少なかった。業態では病院は高齢者施設、事業所給食より洗い残しが少なかった。作業中の拭き取り検査で一般生菌数は平均 9.3 ± 17.8 で、性別による違いはなかった。

【考察】

手洗いチェッカーを活用することで、洗い残しが目視確認でき、その後の意識した手洗いの実践に繋がると考えられた。手洗い指導がより必要な対象は既存社員では調理補助、新入社員では男性・調理師であることが明らかになった。拭き取り検査の結果から、十分な手洗いが実施されていることが推測され、可視化による教育効果が示唆された。今後は、測定後すぐに結果が数値化できるATP拭き取り検査も手洗い指導に活用し、教育効果を検討していきたい。

演題「適正体型、適正生活習慣、および活発活動群における

生活習慣病因子、インスリン抵抗性と疾患における意義」

【目的】

適正体型と活発活動(運動習慣含む)の方は(一部禁煙・節酒を含む)、その対極のメタボに比し生活習慣病要因が少、インスリン抵抗性が小で関連疾患・服薬が少ない特徴が想定される。今回、生習病外来及び給食会社健診とその指導(産業医・管理栄養士)実績から検討した。

【方法】

BMI23(インスリン抵抗性正常上限、病的やせ除く)未満、腹囲：男性 85cm、女性 80(BMI 23 相当)未満を適正体型 A 群。6 千歩(生活習慣病センターは 8 千)歩/日以上又は 30 分以上の汗ばむ程度週 2 回以上の運動習慣有を活発活動群 C 群とし比較した。一部禁煙及び節酒(飲酒 1 合/日相当以内、飲み会 3 合内又は総エネルギー調整可の方)例を適正生習慣 B 群とした。BMI24 未満、歩数 6 千(外来は 8 千)歩以上の良好群、BMI20~24、歩数 4~6 千歩の普通群、BMI24 以上、歩数 4 千歩未満の不適切群と比較した。

【結果】

1. 企業健診成績：AB 群(n=19)vsAB(-, 10)群では体脂肪、腹囲、血圧(収縮・拡張期)、尿 γ -GTP、TG で AB(-)群が有意に($p < 0.05$ 、以降全て)高く、AC(10)群 vsAC(-, 19)群で腹囲が AC(-)群が高く、HDL が低値。BC(5)群 vsBC(-, 6)群で BMI、血圧(収縮・拡張期)が BC(-)群で高値。ABC(8)群 vsB 群(16)で BMI が B 群で高く HDL は低値。良好群 AC(16)vsAC(-, 3)群で腹囲、HbA1c が高く、普通群(6)で AC(-)群に比し BMI が低く、HDL 高値。2. 生習センター外来成績 AC 達成群(26)では非達成群(23)に比し体脂肪率(22vs28%)、腹囲(78vs90cm)、BMI(21vs26)、HbA1c(6.1vs6.9%)、FBS(118vs143mg/dl)、HDL(65vs49mg/dl)と良好。Cookie meal 負荷 GTT のイ抵抗性指数は 25、14 例で前者：イ(1h9、AUC I、AUC I x AUC BS 大)で抵抗性がより小、服薬数 5 vs 7 種/日、総医療費¥17 千 vs 37 千/月と明らかに小であった。

【結論】

適正体型・活発活動(一部節酒・禁煙含む)はイ抵抗性の最小化を介し多項目生習病因子の改善、薬物の節約と総医療費の削減(年間 1 名 24 万円)に貢献した。